看護職部門

心を取り戻した瞬間

【小川（おがわ） 真紀（まき）・宮城県】

第3回 忘れられない看護エピソード 看護職部門 優秀賞

震災から1年近くたったあの日、私は初めて心から泣いた。仙台で被災し、役所で訪問助産師として働く私は、沿岸部に派遣されることはなかったが、続々と届く悲惨な報告に心がまひした。

命を落とした人、その家族、何千もの人々の叫びが聞こえるようだったが、その声に反応する心を失っていた。とにかく目の前にある仕事を無心でこなし、気が付くと震災から1年近くがたっていた。

そのころ、新生児訪問で、あるお宅を訪問した。そのお宅では、２歳８カ月の長女を津波で亡くしていたので、言動には注意を払わなければと私は緊張していた。

チャイムを押すと、お母さんが笑顔でドアを開けてくれた。中にはテーブルに芋ようかんとお茶が準備され、赤ちゃんは和室ですやすやと寝ていた。

そして一番明るい居間に新しい仏壇があり、幼い女の子の写真が何枚も置かれ、その周りに好きだったであろう玩具、お菓子がたくさん置いてあった。私が「お線香を1本あげさせてください」と言うと、にこやかにお母さんは「お願いします」と答えた。お線香に火をつける私の手が震えた。手を合わせるとついに涙があふれた。止めようとしても止まらない。「すみません」。謝る私にお母さんも泣き出した。それから言葉なく2人でしばらく泣いた。

その後もお互い泣いては謝り、笑っては泣いた。

あの日、たまたま祖母の家に長女を預け買い物に出ていて、それきり祖母にも長女にも生きて会うことはなかったと話してくれた。

「絶望の中で、新しい命が生まれたことが何よりの救い、この子にはお姉ちゃんがいつもそばにいます」と、お母さんは言った。会話の中でその言葉にたどり着いたようだった。

私はこの日、看護することで自分自身がケアされることを学んだ。私に泣き方を思い出させてくれたのは、亡くなったお子さん、傷ついたお母さん、そして健やかな赤ちゃんの存在だった。
看護は一方的なものではないことを私に教えてくれた経験であった。